

## 46 名古屋博物館所蔵の木骨について

蒲原 宏

江戸時代に製作された木骨（木製人骨模型）については「江戸時代に作製された木製人体骨骼模型（木骨について）」日本医史学雑誌一七巻二号（一九七一）をはじめ一九七二年第二三回国際医史学会（ロンドン）で既見の星野木骨（一具）各務木骨（二具）の計三具について報告した。

その後、一九七九年の第八〇回日本医史学会で「奥田万里とその木骨について」を報告し、各務文献の門人奥田万里が工人池内某に木骨を作製させ、その一具が安井猶次郎氏（大阪市住吉区黒江中七一―二五）に所蔵されており、これは奥田万里（周道）が、その著『鈞玄四科全書―整骨篇』の附篇『奉整骨術木制人骨全形文』に記録し名古屋医学館への献納後に薬品会に展示され『尾張名所図会』に収載されている「木像人骨」の原型であることを、木

骨に附された文書から推定しておいた。

そして、名古屋地方にもう一具、名古屋医学館に献納された奥田系の木骨が存在する可能性について言及した。

一九八二年（昭和五七）名古屋博物館で「名古屋の博覧会」が催され、安井氏蔵の木骨が展示された。この展示木骨と類似の木骨が名古屋市内某小学校に所蔵されていることが名古屋博物館に知らされ、一九八五年（昭和六〇）同館榎英一学芸員から前記の安井氏蔵の奥田木骨との同定を依頼された。

その後、この木骨は名古屋博物館の収蔵するところとなり、組立てられたが、その構造・手法は全く安井氏蔵の奥田木骨と同一のものであり、恐らくは同時期に作製されたものであろうと推定される。

頭蓋骨の形が若干異なるところもあるが、歯牙の形態、はめ込みの様式、足根骨の彫型様式、連結法、台座もほとんど同じであり、工人池内某の作品として間違いのないと考えられる。体長も約一五五センチで大略同高である。名古屋医学館に献納された奥田木骨と断定して差支えな

いと考える。従つて、この木骨の製作年代は『奉整骨術木制人骨全形文』が成つた文政壬午歳（五年）十月十三日（一八三二）以前であるが『鈞玄四科全書—整骨篇』の奥田万里の「自跋」が「文政庚辰冬日」となつてゐることから、少くとも一八二〇年（文政三）よりも遡れるようにも考えられないこともない。前記木制人骨全形文の中に「文献カ模刻スル所ノ人骨全形ハ既ニ東武官医ノ諸公之ヲ官ニ聞シメ躋寿館ニ献納セシム後ニ模刻セル所ノ者ハ周道カ家ニ収ム今ヤ文献已ニ没シ其徒弟衆多散在ストイヘトモ文献カ微意ヲ頗ル伝ヘ得ル処ノ者ハ固陋ナリトイヘトモ実ニ周道一人ナリ—（中略）今茲ニ吉雄俊蔵周道カ旧交アル有ルヲ以テ（中略）其医官ノ長浅井氏ニ謀ル（中略）本藩ノ一科ニ備シ事ヲ聞ス、遂ニ其術ト共模骨トニ献備セン事ヲ許サル（中略）模骨一具、整骨新書全部玲瓏図一筐自著鈞玄四科全書中整骨篇二卷筋骨療治目次一卷泰ク之ヲ医学館ニ献備ス其手術ノ如キハ医官中沢専蔵ニ伝授ス。蓋シ是亦辱ク台命ヲ蒙レハナリ。幸ニシテ願クハ此術此模骨ト長ク大藩ニ留リ伝リテ医官諸公万カ一モ取ル事有テ済生ノ一助ト為ツテ廃ヲ起シ痾ヲ愈スノ微効ヲ

奏スル事有ラハ周道等カ積年ノ寸衷達スル所以也」とある。名古屋医学館への献納に蘭方医吉雄俊蔵（一七八七—一八四三）が医学館の浅井正封（一七七〇—一八二九）への仲介の勞をとつたことが知られる。藩医学館廃止後、木骨のたどつた経緯を証する文書は全く不明である。旧所蔵の小学校が明治初期地域住民の発意合力によつて設置されたことから、創立時に教材として旧所蔵から寄贈されたものと考えられている。伝来は不明。

この木骨の出現により江戸時代に作製された木骨は一〇具あり、そのうち五具が現存していることが確認されたことになる。今後はこれらの木骨については人類学的、解剖学的な測定調査、保存管理及び原像への復原などについての学際的な研究が行われる必要がある、世界的に貴重な医学文化遺産である。

（日本歯科大学新潟歯学部医の博物館）